

盤・頭蓋・胸骨に多くみられた。骨X線写真と比較すれば、osteolyticな所見が多いが、所見のないものも数例みられた。その他治療との関係、follow-up scanで“cold” lesionの出現した症例などについて報告する。

8. 肺癌、前立腺癌、乳癌における Follow-up Bone Scintigraphy の検討

○藤村 憲治 佛坂 博正
福井康太郎 安永 忠正
片山 健志
(熊大・放)
別府 進
(三井病院・放)

肺癌40例、前立腺癌16例、乳癌56例の再骨シンチについて検討を行なった。

初回骨シンチにて異常がみられ、骨転移の確診されたものの再シンチ所見は以下の通りであった。肺癌では67% (14/21) に病巣の進行 (progression) がみられたが、前立腺癌では、病巣の改善 (regression) 92% (11/12) と高率であった。乳癌では、変化なし (no change) 32% (6/19), progression 36% (7/19), regression 32% (6/19) と同程度であった。

初回骨シンチで異常なしと判断した再シンチ症例では、肺癌16% (3/19)、乳癌24% (9/37) に新たに骨転移が出現した。

肺癌では、抗癌剤治療などを行なっても、再シンチで新病巣の出現頻度が高く、逆に前立腺癌では、ホルモン療法などにより、病巣の改善を示したもののがほとんどであった。乳癌では、多彩な再シンチ所見を呈するものと考えられた。

9. 骨シンチグラム上、多発病巣を認めた結核の1症例

○中島 彰久
(長大・放部)
三宅 秀敏 山下 勝義
林 邦昭 本保善一郎
(同・放)
木下 博史
(長崎市民病院・放)

近年、骨シンチグラフィーの普及は目覚ましく、特に悪性腫瘍における転移巣の早期発見や治療効果の判定に欠かせない存在となってきている。

また、悪性のみならず、種々の良性疾患においても RI の集積がみられ、一部には多発性病巣の描出も報告されている。

今回我々は、肺結核の治療中、骨の悪性腫瘍も疑われたため、^{99m}Tc-MDPによる骨シンチグラフィーを行なったところ、多発性の全身骨への RI 集積が見られ、治療により改善が見られた肺、リンパ節及び骨結核の55歳女性の症例を経験し、現在まで、骨結核による報告がないので、ここに発表した。

座長のまとめ (7~9)

矢野 潔

骨シンチは悪性腫瘍の骨転移の検索に有効な手段であるが、その陽性像の分析は容易ではないし、陰性像の場合でも骨腫瘍の事がある。従って骨シンチによる骨腫瘍の診断には多くの問題が残っている。熊大の佛坂等は cold lesion と転移性骨腫瘍をとり上げている。cold lesion と病型との関係は未定であるが、osteolyticな変化の81.2%にcold lesionを認めている。又、治療によって cold lesion が hot lesion に変化した事も例示し、cold lesion に閑心を示している。熊大の藤村らは、肺癌、乳癌、前立腺癌についての骨シンチの follow up を行っている。ホルモン療法を行った後の前立腺癌では大部分が regression を示すが、他では no change も含めて多彩な変化を示し、follow up の

必要性を説いている。長大の中島らは、骨結核の骨スキャンを初めて行い、多発性に陽性であった症例を示し、骨腫瘍の際の陽性スキャンとの鑑別について注意を喚起した。

10. 肺癌における肺血流シンチグラフィの臨床的検討

○坂田 博道 島袋 国定
城野 和雄 中條 政敬
篠原 慎治
(鹿大・放)

39例の肺癌患者に対して^{99m}Tc-MAAによる肺血流シンチグラフィを実施し、perfusion defectの範囲、左右肺血流比、放射線治療効果等につき検討した。

結果：1) 肺門部肺癌21例では全例著明な血流障害がみられ、肺血流分布の把握に優れており、肺葉以上のperfusion defectが19例(90%)にみられた。

2) 肺野部肺癌では有用性は少ないが、転移リンパ節によるperfusion defectの有無や治療効果の判定に有用であった。

3) 肺門部肺癌では放射線治療後、胸部X線像上改善がみられても、血流の改善がみられないものが19例中7例(37%)にみられた。

4) 肺動脈造影所見上、狭窄7例中5例、絞扼4例、圧排1例、流入遅延3例では放射線治療後の肺血流の改善がみられたが、閉塞5例、収束1例、狭窄7例中2例では改善はみられなかった。

11. ⁶⁷Ga-citrateによる肝外性発育型肝細胞癌の診断における有用性の検討

○村上 純滋 綾部 善治
鴛海 良彦 仲山 親
鴨井 逸馬 松浦 啓一
(九大・放)

肝細胞癌の診断には、肝シンチグラフィや α -fetoproteinの測定と共に、⁶⁷Ga-citrateによる腫

瘍シンチグラフィが利用されている。

我々は、手術あるいは剖検により、肝外性腫瘍として発育していたことが確認され、また組織学的に診断された肝細胞癌5例について、⁶⁷Ga-citrateによる腫瘍シンチグラフィの有用性について検討した。その結果、臨床的に肝細胞癌が疑われた場合、⁶⁷Ga-citrateによる腫瘍シンチグラフィは必ず行なうべきであるという結論に達したことを、症例を呈示すると共に報告する。

12. ¹²³I標識6 β -Iodomethyl-19-norcholest-5(10)-en-3 β -ol(¹²³I-NCL-6-I)を用いたAdrenal scintigraphyの臨床的評価

○鴛海 良彦 鴨井 逸馬
仲山 親 松浦 啓一
(九大・放)
前田 稔 小島 正治
(同・薬学部)
館野 之男 井戸 達男
(放医研)

¹²⁷I(P, 5n)¹²³Xe→¹²³I反応で得た高純度の¹²³Iを用いて6 β -Iodomethyl-19-norcholest-5(10)-en-3 β -olを標識した(¹²³I-NCL-6-I)。これを臨床例4例に使用して、全例に明瞭な副腎シンチグラムが得られた。

至適検査時間は¹²³I-NCL-6-Iを静注後、48~72時間であり、従来の¹³¹Iを用いての検査時間に比べ極めて短時間の検査が出来た。

被曝線量も¹³¹I使用の場合に比べて著明に減少する。¹²³I-NCL-6-Iは極めて優れた副腎シンチグラフィ用放射性医薬品と考える。

座長のまとめ(10~12)

木下 博史

10席では血流肺シンチで、左右肺活性比は病態を良く反映していると発表された。この比は電算機の付属していないシンチカメラでも、僅かな手間で求め得るものであり、再現性もよい。

11席：通常の肝シンチグラムだけでは、原発性